

# 平成梅林整備推進事業 順調に進み募金目標達成へ



## 第二回総会開催

四月七日(土)茨城県立歴史館において第二回総会が開催されました。五二名の会員が参加し、十八年度の事業計画と収支決算報告、十九年度の活動方針案・事業計画案・収支予算案の五議題がすべて原案通り承認されました。(四面参照)

和田会長の挨拶では、平成梅林推進事業への反応として、全国的にも大きな期待が寄せられていること、募金も順調に進んでいることが紹介されました。

来賓代表として挨拶された加藤浩一水戸市長は、中心市街地の復活と観光の通年化を計るため市が取り組んでいる事業を紹介され、会も色々アイデアを出して活動してほしいとの期待を述べられました。

討論では、平成梅林の設置において偕



総会の様子

楽園の見通し景観を損なわないよう配慮してほしい、偕楽園の入場料を取ってはどうか、行事の広報を工夫してほしい、偕楽園の写真や絵画などの展示会を企画してはどうか、など熱心な討論が行われました。

## 平成梅林推進事業の現状

初年度の事業として一三三三三〇本の苗木を発注しました。六月六日県公園街路課の二名と会の役員二名が視察したところ、県内かすみがうら市の苗畑で順調に成育していることを確認できました。

県公園街路課ではその後も全国の梅品種の調査を進め、梅を持っている著名な公園や施設にある梅の品種の一覧表を作成し、偕楽園と弘道館の品種との照合を進めています。また、県による苗畑の整備は、第一回目分として好文橋北の二〇坪(六〇〇坪)が準備中で、その隣接地一畝(二町歩)を第二回目以降の苗畑として整備する計画です。

第一回の苗木の植付けは平成二十年二月十六日の植樹祭の日に予定しています。それまでに苗畑の整備や管理方法の確定などを行う必要があります。

次年度以降の苗木の確保については、接ぎ穂は都立農林高等学校ほかに協力をお願いして確保します。苗の台木は市内天神山木楽園主寺門久雄氏が約一〇〇〇本分を確保してくださり、接木も引き受けてくださいます。

三名園の岡山後楽園と金沢兼六園から、水戸にない品種の苗木を寄贈してくださるようお願いしております。また、他にも

協力の申し出があります。

## 募金・助成金の現状

募金は八月三十日現在で三八六万円となり、第一期の目標を達成しました。この募金は、一〇二口の個人と有志の団体からの応募が多いのが特徴です。会の呼びかけが偕楽園を愛する多くの市民の心を動かしたと思っております。

これで苗木の購入費用はめどがつきましたが今後の育成管理や定植に向けて多くの費用が見込まれるため、募金は引き続き行います。会員の皆様のご協力をお願いします。

なお、大好きいばらき県民会議(こ近所の底力再生事業)助成金十万円を受けることが決まりました。

## 第一期事業の実施計画

第一期の募金目標を達成できたため、来年度に約三〇〇品種一〇〇〇本の苗木を接木育成して購入することとなりました。これで合計五〇〇品種余になります。

その場合、平成二十一年に第二回分の植付けとなりますが、その分の苗畑の準備が必要になります。さらに、早ければ平成二十五年以降に成木として定植する新しい梅林の場所も確定しなければなりません。会は、県公園街路課との密接な連絡協議を進めています。

貴重な梅品種を確実に育成する手厚い体制を作ることが大切になります。これはお金だけではできません。除草などの管理に協力する「梅ボランティア」など、皆様のご協力をお願いいたします。

# 記念講演「千波湖と偕楽園」

## 行事報告

第二回総会の記念講演会として「千波湖と偕楽園」が催されました。本会副会長大槻功氏（茨城大学教授）が、スライドを用いて、地図などを示しながら千波湖と偕楽園の歴史的關係を、話されました。

### 千波湖 残っているのが不思議

水と緑の水戸市のシンボルとなっている千波湖は実は残っていることこそ最大の謎といえます。

都市の中にあつた湖や池・沼など、戦後の高度成長のなかで埋め立てられて大半が姿を消しました。

千波湖が残つたのは偕楽園があつたからです。偕楽園は千波湖を借景とするだけでなく、一体となっています。そして偕楽園は水戸の二名君の二員である徳川斉昭公が作ったものとして、水戸および茨城県の誇りであつたのです。だから、何度かの埋め立て計画を乗り切つて現在の姿を保っています。

### 斉昭公の天保の国づくり

九代藩主斉昭公は藩主就任後、創設時の武士と藩の姿を取り戻すことを目指して大規模な藩政改革に着手しました。改革の目標は、経界の義（全領検地）、土着の義（藩士の領内移住）、学校の義（藩校弘道館と郷校の設置）、総交代の義（家臣の江戸・定府を廃止）でした。この改革で、藩内各地に重臣が家来とともに移住して海防のための砦を作つたり、各地に郷校が設置されたりして新しい国づくりが試みら

れました。城下町水戸も西端に新屋敷（新莊）が開かれ、さらに西南端に弘道館の付属休養場として偕楽園が開設されるなど、新しい街づくりも行われました。

偕楽園は好文亭と庭園がある遊覧の場だけでなく、御茶園や陶器製作所が設けられるなど、藩内の物産増殖のための試験場の役割も持つていました。



大槻副会長の講演

### 江戸時代の千波湖

千波湖は江戸時代初期、水戸城下町を作る時に城の下の低地に広がっていた沼地や低湿地を埋め立てて作られたものです。

江戸時代、千波湖は水戸城の外堀として武士には重要なものですが、水戸に住む町民にとっては魚釣りや鳥獵、船遊びが禁止されているだけでなく、藻刈・泥浚いの負担があり、洪水の原因ともなつたので邪魔者だったとも言えます。

### 明治維新後の千波湖と偕楽園

明治四年の廃藩置県で水戸藩がなくなり、千波湖の維持管理はここを水源と

する下流の村々の責任となりました。農民は、水利土工会、のち水利組合を組織して、水門と水路の補修・管理や千波湖の藻刈などを行います。人手と費用が不足して、千波湖は荒廃します。溜池が町の中にあるわけで、周囲の住民や農民との摩擦も起こりました。

一方、偕楽園は明治六年に日本最初の公園の一つとなり、県が管理しました。同じ明治六年に、偕楽園の二画を割いて常磐神社の創建が認められます。こうして、偕楽園は藩の支えを失つた後も、水戸と旧水戸藩の精神的支柱として存続することになりました。

### 千波湖改修事業

明治以降、千波湖が荒廃したうえ、千波湖上流の開墾・下流の干拓が進み、用水が不足します。この対策として、千波湖の三分の二を埋め立てて水田を造成し、その売却代金を資金として那珂川からの揚水施設と千波湖の整備を行うという案（三方一両得）が県から提案され、実施されます。

工事は大正九年から昭和七年まで行われ、水戸駅の南が一面の水田となり、桜川が延長されて那珂川に直接注ぎ、残された千波湖は護岸のうえ周囲を遊歩道が廻るよう整備され、面目を一新しました。

偕楽園は明治二五年に水戸市が管轄していましたが、大正九年に茨城県の管轄に戻されて整備が進められ、

十一年には国指定史跡および名勝に指定されました。

### 偕楽園と千波湖の戦中戦後

戦時下の偕楽園は水戸学のメッカとなり、東湖神社が常磐神社の中に、護国神社が桜山に創建されましたが、終戦直前の水戸大空襲の目標となり好文亭と常磐神社が焼失するなど大被害を受けました。

戦後初期の物資不足の際、偕楽園の手入れが行き届かなくなり、樹木が燃料として採取されるなど荒廃しました。千波湖を排水して水田にしたのも戦後のことです。

焼失した常磐神社と好文亭は昭和三十三年に再建され、以後観光の目玉となりました。

### 駅南再開発と千波湖の公園化

高度成長にもなつて水戸の商業が繁栄するなか、立ち遅れた下市の再開発が着手され、その延長の千波湖干拓地も駅南再開発事業で宅地化されました。

千波湖周辺の公園化が水戸市によつて計画され、テニスコートや偕楽園レイクランドなどとして昭和四十年代に実現します。それが一通り完成した後、県が偕楽園と一体として開発する大規模公園化構想を立案し、現在進行中です。これは偕楽園の元の姿を取り戻す「原状回復」をコンセプトとしています。色々困難があります。

